



発行所
 (有)朝日新聞
 新庄販売
 末広町7-5
 TEL (23) 1950
 所長 堀三幸

広告の掲載希望は
 (23) 1950へ

新聞は全ての教科の参考書

高一 高橋進太郎

うことである。たとえば、最悪の体調の時の練習である。岸先生は以前、ツツガムシに刺されて全身真っ赤に腫れ上がったことがあるそうだ。その時、「どこまでやれるかやってみよう」と思い、普段以上に稽古を続けたそう。また鎖骨が外れた時も同様、「こんな状態でどこまでやれるか」と、鎖骨が外れたまま腕立て伏せをやったそう。

要は、闘いは時を選ばずやってくる。ということ。最悪の体調の時でも、避けねばならぬ災いはやってくるということ。その時「今はまずい、ちよつと待ってくれ!」とは言えない、ということだ。どんな時でも言い訳なしに、一発で相手を倒せるようにしておけ、ということだ。生き残るために。

こんな話を聞きながら、そして実際の先生を見ながら練習している際の、体の痛みなどなんとも思わなくなる。前は、肩が痛い、手首が痛い、膝が痛い、と時によっては病院で痛み止めの注射を打つてもらっていたのだが、今はもう意識しない。痛みは変わらずにあるが、年取ってあつちこつ痛むのは生きていく証候、と思ひ稽古を続けている。おかげで体調はますます快調である。

忠次郎短歌の原点

⑥

斎藤茂吉短歌ポス্ট選者
 新庄コンピュータ専門学校講師
 梁瀬龍夫

明治時代の仮名遣い論争
 明治五年(1872)、「学制」が發布された九月、「小学教則」が發布されて全国的に統一した教育が実践され、明治政府の仮名づかいに対する態度、方針を明示したものであった。「綴字」に「智ノ糸口」、「うひまなび」とありすべて歴史的仮名づかいであった。幕末期の仮名づかいは統一されていなかったのに歴史的仮名づかいに統一されたのはなぜか。一つの理由として当時の一世を風靡した復古精神の反映があった。二つ目は当時の文部省に多くの国学者が在職していたことでも榊原芳野は文部省編集寮に勤務しわが国最初の小学校用教科書、「小学読本」を著作し明治8年には、「小学綴字書」、「小学綴字翼」の二書を出版した。しかし上代や平安朝初期の文献の仮名づかいは基本として常用にするには問題があった。多くの音韻に変化が見られ仮名と発音の不一致が多かつた。蝶(てふてふ)葵(あふひ)醉(ゑふ)と書いて「チヨウアオイ ヨウ」と読むなどは極端な例としても、同じ「オ」の発音を、

「山を」のをと、起きろの「ちチ」フツツを廃シ「ジ

して、明治・大正・昭和三代の長きにわたり改定の是非をめぐる賛否両論がはげしく展開される。国語の学習の平易化をはかる試みが明治11年頃に起きた。明治13年「尚古仮名遣」、「17年「かなのしをり」、同「かなづかひのはやまなび」、18年「かなづかひ教科書」など教科書、便覧、小辞典が刊行されたが、これらは歴史的かなづかいで明治の世の人々に特に小学校の児童には非実際的で習得しがたいものであった。

明治14年には漢字を廃止し、専ら仮名を国字にしようとするいわゆる仮名専用論者まで現れ三種の社会的団体が結成された。歴史的かなづかい保持者の明治14年「かなのもと」、15年「いろはくわい」(発音仮名づかい主義者)。

これらが16年に大同団結して「かなのくわい」をなつた。会長は有栖川宮威仁親王、吉原重俊、肥田浜五郎が副会長。

明治32年10月、帝国教育会は国語、国字改良の必要を認め、33年5月従来の仮名づかいは発音通りに改めることを発表した。その中には「お・オ」、「ゑ・エ」を廃し、濁音ノ

「実践空手」岸空手、そして岸信行先生のこと

成田政彦

岸空手は武道である。すべからず、巷で「空手」といえばそれは武道であると思つてしまふが、どうも違うようだ、と岸空手を習い始めて気が付いた。

私の空手経験は、二〇歳の時から足かけ五年間、極真空手とその傍流を習つただけであり、しかも黒帯も取つていない。このような若輩者が何をぬかすかというところががしかし、その練習の中身は知つているわけで、それと岸空手の練習内容などの違いには気付いた。

岸先生の、昔の武家屋敷を改造した道場で修練に励み、「空手は一発で倒せなければならぬ」という技の一端を我が身体で体験させて頂き、そして岸先生の空手に対する考え方を聞かせて頂くにつけ、「武道とはこういうものか!」と刮目させられた。即ち、常に「死」と向き合つていること。

岸先生はよく、自分の死に方の話をされる。ここにはとても書けない切腹の話である。しかも実際の動作をしながら、本番

さながらの迫力で話される。

この死に方は、アメリカ力でバツト折りの演武をした際(「絶対に折れないバツト」という触れ込みで売り出されたバツト故「じゃあ折つてやろうじやないか」となったとのこと)、バツトは折れたが脛も直角に折れたというその時、少しも表情を変えずに折れた足を自ら整復し、演武場を後に歩いて帰つた経験から「できる」と思つたそうだ。

ほんの一五〇年前、戦国時代からだいたいぶ時代を経た江戸時代末期においても、街には「北辰一刀流」とか「直心影流」などの看板を掲げる町道場がいくつもあつたであろう。坂本龍馬、勝海舟、山岡鉄舟など、時の日本を転換させた志士の多くは、それらの道場で幼少より鍛えられて育つた若者達であった。

そしてそこで教えていたのは、「人を斬る剣」である。一撃の下に相手を切り倒せなかつたら逆に自分が殺される、という時代の剣である。向き合つて座つていても、次の瞬間、刀を抜い

ていても、次の瞬間、刀を抜いて

体を整える

健友館はら整体院

●整体療術は痛いイメージをお持ちのあなたも怖くない痛くない!





発行所
 新庄町7-5
 新庄三井
 末広三井
 TEL (23) 1950
 所長 堀 三井
 広告の掲載希望は
 (23) 1950へ

「実践空手」 岸空手、
 そして岸信行先生のこと」(最終回)
 成田 政彦

岸道場には山岡鉄舟の手になる書が掛けてある。なんと書いてあるのか読めない。
 しかし、迫力は伝わってくる。岸先生によると、達人の手になる書は楷書での修練がしつかりできているので、形を崩して草書体になっても崩れないのだとのこと。
 まず、基本の形が大事である。基本の形の修練を積み重ねて初めて応用ができる。当たり前のことだけれども、できていない。私の場合はまず基本の形がまったく、できていない。空手では「突き」である。「突き」が基本であるし、「突き」が死命を制する。
 岸先生は一日一千回、二千回の巻藁突きを何十年も積み重ねてきた。その突きをもちろんと、軽く突かれるだけでもむち打ち



脳震とうになるくらいに衝撃がくる。もちろん突かれたところも痛い。わずか10cmほどの至近距離からの突きなのだ。
 大地のエネルギーが足、腰、肩を伝って拳のピン先一点からほとほとしたかの如くである。空手の形は「常に基本。迷ったらまた基本に戻る。」その「戻れる基本」が、岸道場で初めて見えた。
 若い頃やっていた空手での基本はあくまでも実戦「競技」を意識した基本だった。「一撃必殺」の突きとは言っても、顔面に当てない「競技」では必殺とはなり得ないし、幸い足技では首から上への攻撃はOKで、しかも当たり所が良ければダウンを奪えるということ、練習のかなりの部分は足技の修得だった。少なくとも60歳、70歳まで現役で闘える身体をつくるなんぞという事は思ってもいなかった。あ、あの練習内容ではそれは「想定外」である。空手とはそういうものだろう、と思っていた。そうではないかも、ということ、を少し思わせてくれたのが

新聞は全ての教科
 の参考書
 高一 高橋 進太郎

る。実戦の時はその型を崩して(応用して)得意即妙の技を出す。というか、得意即妙の技が自然に出てくるのだろうか。身体がとつさに反応して、そこまで、基本の型の動きを身体に覚えさせるしまた、岸先生は実戦での動きを常に研究していらつしやる。

たぶん死ぬまで研究し続けられるのだろうかと思う。そしてそのエネルギーは数多くの実戦を闘つたところから出てきているのだらうと思う。机上の理屈からはまともな実戦の研究などは生まれまい。自分が闘つてみないと。
 最後にもう一度言わせて頂く。新庄最上が生んだ世界に誇る空手家、岸信行先生について唯一紹介された本「空手仙人岸信行 枕にキノコが生えるまで泣け!」(不動武著、東邦出版)は、新庄人必読の書である。ぜひ読んで頂きたい。読まれる方の人生経験によって味わいが違ってきます。

素手での実戦の究極の形である空手が実は、実戦などとはほど遠い高齢者の方々にも適している、というのはおもしろい。そしてそういう足腰を練り上げる基本の延長線上に「型」もある。

忠次郎短歌の原点 ⑥⑥
 斉藤茂吉短歌がスト選者
 新庄コンピュータ専門学校講師

梁 瀬 龍 夫

高校生の仮名遣いの乱れ(3)

「ゆう」と「いう」の混乱
 「現代かなづかい」では、ユの長音は「ゆう」と書く。ただし「言ふ」は「いう」と書き「ゆう」とは書かないとなっている。これに関して、高校生に次の表記が見られた。
 ・ わからないとゆう、だけで：
 ・ 感想とゆうのは：
 ・ あやまればすむとゆう、時代
 ・ 塩とゆうのは：
 ・ こうゆう、彼にも：
 ・ そうゆう人だつて：
 これらは「ユ」の長音は「ゆう」と書く、というきまりに従えば当然の表記である。
 ゆうがた(夕方) ゆうびん(郵便) りゆう(理由) と書くのはもちろん「髪をゆう(結)ゆ根をゆう(結)と書くによいのであるから右の語の場合に「ゆう」と書くべきなのは当然である。つまり、ユの長音という点では右の語の「ゆうがた」以下の語と同一だからである。これを誤りとされては高校生だけでなく一般人にしても混乱しやすいのである。現代かなづかいは原則的には発音のかなづかいであるのにもかかわらず「言ふ」を「いう」と書くという事は、自家撞着というべきだからであ

ものである。
 「とお」と「おい」についても混乱があった。
 オ列の長音は、「おう」「こう」「そう」「とう」のように「う」をつけて書くことを本則とするという趣旨で
 おうぎ(扇) こうふく(幸福) はなそう(話そう) きのう(昨日) やすもう(休もう) かえろ(帰ろう) おはよう(お早う) のように書くのであるが、実はこれは「本則」であつて、これには例外がある。
 「通る」や「大きい」などは「とおる」「おおい」が正しいとされる。つまりこれらの語は「う」をつけるオ列の長音ではなくて、これらは旧かなづかいで「ほ」と書かれていたが、現在「お」と発音されることばだからとしても現代かなづかいでは、もおし(催し) とごおる(滞る) などをあげている。高校生の例を見るときまりに従つた「いわれたとおり」「そのとおり」「おおざつぱ」などあるが、次の表記にも見られる。
 ・ 前にも言つたとうり ・ そのとうりで ・ 書いたとうりに ・ 思つたとうりに ・ もととうりに ・ まちどうしく ・ 一気に読みとうす

移転しました 新庄市金沢字前野2019-4 (メガネのパーミーキ隣)

健友館はら整体院

